

日本におけるスポーツ少年団の過去・現在・未来

スポーツマネジメントゼミナール 1313015 遠藤 純夏

1. 研究動機・研究目的

現代の社会情勢の大きな変化の中、1962年から続くスポーツ少年団の活動は、様々な点で問題や課題が生じている。また、総合型地域スポーツクラブの創設により、スポーツ少年団のあり方も変わってきている。今まで50年以上続いてきたスポーツ少年団は、その長い歴史の中で日本にどのような影響を与えてきたのだろうか。そしてこれから、総合型地域スポーツクラブとどのような関わりを持っていけばいいのだろうか。

本研究の目的は、現在の大学生に対して調査を行うことで、過去のスポーツ少年団の活動の成果を見ることである。これまでのスポーツ少年団の研究においては、スポーツ少年団の卒団生に対する調査は行われてこなかった。スポーツ少年団のこれまでの成果を振り返り、現状を見つめることで、スポーツ少年団を中心に総合型地域スポーツクラブも含めた日本の地域スポーツにおける子どものスポーツクラブが今後どのように発展していけばよいか考えていきたい。

2. 研究方法

- 1) 調査対象者：J大学スポーツ健康科学部の1年生、2年生、3年生
- 2) 調査期間：2016年6月10日
- 3) 調査票の回収方法：本研究の調査票は、1年生が対象の授業で配布した。授業には2、3年生も参加していたことから一緒に分析を行った。調査票は、全員が記入し終わったところで回収した。回収数は、259部であった。
- 4) 調査項目：回答者の1. 個人的属性、2. スポーツに対する気持ち、3. スポーツ少年団での活動について、4. 現在の実施種目の状況についての調査を行った。
- 5) 分析方法：統計処理ソフトSPSS12.0を用いた。

3. 主な結果と考察

運動・スポーツが好きである気持ちや、得意かどうかという考えに関しては男女差が見られないことが分かった。しかし、体育系の学生ではない人に対して調査をした場合は、運動の好き・嫌いや得意・不得意に関しては男女間で有意差が見られる可能性がある。また、現在の運動実施の頻度は男性の方が高く、今後も運動・スポーツを続けていきたいという意思も男性の方が高いことが明らかになった。男性の方が運動・スポーツに対して積極的に取り組んでいこうという意思を強く持っていると考えられる。また、女性に比べて男性は、現在も運動を高頻度で実施している。先行研究にもあるように、20代の女性の運動習慣は、20

代の男性や女性の他の年代よりも低い。本研究でも、男性と比べて女性は運動を継続していくことに対して強い意思が見られないという結果が出た。運動・スポーツを習慣づけるには運動を継続したいという意思が必要なので、長期的に運動・スポーツを習慣化させるためにまずは運動を継続したいと思えるようにするべきであると推察される。

運動・スポーツを好きである、得意だという意味はスポーツ少年団の加入経験の有無による差はないことが分かった。また、家族が運動を好きであるかということに関しても、スポーツ少年団の加入経験の有無にほぼ差はないことが分かった。スポーツ・運動を継続する意思があるかどうかに関しても、スポーツ少年団の加入経験による差はあまり見られなかった。運動・スポーツの経験は、スポーツ少年団以外の場でも可能なため、このような簡易的な質問項目で調査してしまうと、特に有意差は見られないという結果になってしまうのではないかと考えられる。

スポーツ少年団に加入していた経験がある人の平均値(3.84)と、加入していた経験がない人の平均値(3.73)には 5%水準で有意差が見られた。この分析により、スポーツ少年団に加入していたことと、将来の運動実施の頻度が上がるということの関連性が推察される。スポーツ少年団において、決まった日にちや時間に継続的に運動・スポーツに取り組んできたことで、将来的にも運動・スポーツを継続し、なおかつ高頻度で行われているのではないかと考えられる。この結果は、スポーツ少年団の一つの成果だと考えられるのではないだろうか。

4. 結論

先行研究と本研究で明らかになったことは、女性は運動・スポーツを継続していこうという意思が男性と比べて低いことである。スポーツ少年団では、現在も女子の活動の強化を行っているが、より一層積極的に行っていくべきであると考えられる。また、スポーツ少年団への加入経験がある人は、運動・スポーツの実施頻度が加入経験のない人と比べて高い傾向が見られるということも明らかになった。この結果から、成長期に運動・スポーツに取り組んだことが、将来の運動・スポーツに対する良い価値観を得ることにつながっているのではないかと考えられる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

今回調査をしてみて、もっと多くの属性の人にアンケートを取るべきだと思いました。スポーツ少年団に加入していた人たちが現在どのような運動習慣を得ているのかなどを詳細に調べていくことで、スポーツ少年団の活動の成果がさらによく見えると思われれます。

本論文の作成において、ご指導いただいた小笠原悦子先生をはじめとする多くの方に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。